
転生物語

チェルシー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生物語

【Nコード】

N5094S

【作者名】

チエルシー

【あらすじ】

転生先は異世界！そして生まれは貴族！体が弱いせいで小さい頃から病院での入院生活を送っていた少年は、死して異世界に転生する。

ブローグ

「うぎゃあああ！うぎゃあああ？（何これえ！何処なのこーー
ー！）」

今自分はもう見馴れた病院の病室では無く…何と言うか中世ヨーロッパの時代に沢山あった様な部屋に寝かされている…もちろん外国のです！

しかも、

「あうあうう（あかちゃんになつてる！？）」

まさかの自分に起きた事態に仰天しそうになるも、取りあえず周りを見回そうとすることが出来ない。

赤ん坊…しかも母親のお腹から出て間もない生まれたてのまだ首の座っていない様な赤子のようだ。

「うあううう、あぶうう（これって、まさか？）」

冷や汗が止まらない。

この展開は、友人が好きでよく読んでいた小説やアニメで良く出てきた展開ではないか！？

そうしてそれは……嫌な予感がするのを必死に抑えながら違うと自分に言い聞かせる。

「あぶあああ、ぶううう（いやいやこれは夢落ちだよね！きつとそうだ？）」

しかし、冷や汗が止まる気配は一向に無い。

そんな悪あがきをしている時女性の声がした。

そしてその女性は、一筋の希望を木破微塵にしていく。

「あら、起きたのね」

「あう？（誰かなこの美人さん？）」

目の前には乳白色の肌に白銀の髪と藍色の目を持つとても綺麗な顔を
をした人が居た。

「ふふふ、可愛い？」

お母様ですよー、分かるかな？？」

「あぶう！？（何ですと！？）」

「お父様も直に来ますからね私の愛しい子」

そう言っ
て自分を抱き上げ優しく抱きしめてくれる腕と手には夢ではありえない温かさ
と柔らかさが有って…

これは夢ではないと気付いてしまった。

気付いてしまったとたん、心が砂になってサラサラと流れ落ちて行
っている気がするの
は感違いではないと思う。

そして認めなければならない。

どうやら自分は《転生》とか言う不確かなモノにあってしまっ
たようです。

ブローグ（後書き）

間違いを指摘をされたら、真っ先に修正！

第一話

この世界に転生してから5年経ち、やっと色々な事を物申せる歳になりました。

喋れるようになったばかりの子供が、大人のような事を言ったりしたら色々可笑しいのは分かっていたので、子供らしく振る舞ってました…今もそうだけどね。

でも、流石に大人（十四歳でしたが+五年なので今は十九歳）…どちらかと言うと青年だけど、その精神で子供らしくは限界が有ったので早熟な子…って感じになってます。出来るだけ子供らしく振る舞うようにずっと努めてはいるんですけどね。

しかも、転生前体が弱いせいで病院生活を送っていた僕ですが…
…今でもベットのうえでの生活をしなければなら無くなっています。

ええ？

と、そう思った方いませんでした？

言ってしまうと、前世では体の中の臓器があちこち悪かったらしいんです。

幾つかの臓器さえ移植出来れば元気に成れると言われていたのですが、移植は間に合わず…そのまま死んでしまいました。

後悔なんてモノはしていません。精一杯生きましたしね…母と父には申し訳ない事をしましたが。

そして、転生後では体の中にある魔力がこの小さい器には大きすぎるために、体が持たないという難儀な体となっています。

この世界では《陣形術》と言う魔法の様なものが有り、それは魔力で魔法陣を出現させ、様々な力を発動させる事が出来る。そしてその陣形術を発動させるために必要不可欠な魔力が有ればある程便利だし、使えればまず仕事に困らないそうです。まあ、魔力が有っても陣形術を余り使えない人もいますが。

だから、私は魔力を持たない人、少ない人には大変羨ましがられる場所に居る訳なのですが……逆に有り過ぎると厄介な事になる事が分かりました。

魔力が有り過ぎて、術が勝手に発動してしまうんです。

そして、体の中に魔力が有り過ぎるだけでもたまに死にそうになるのに、勝手に術が発動することで体の中身が滅茶苦茶になってしまふ事で自分は瀕死状態に。

そして、発動は何かしらあるたびにしそうになる。

自分には子供の頃からちゃんと意思が有ったので、有る程度は抑えられるんです。抑えても発動しそうになった反動で、高熱などが出てしまったりしますが。

でも、それは小さい規模だけであって、とつさの時や大きい規模の術が発動しそうになればもう抑えきれなくなってしまうです。

一回だけ、とても大きな規模で発動してしまい、三途の川…の様な

ものを見てしまった事も……

良く死にかけながらも生きているのは、自分の生まれた家が陣形術の名家だったお陰です。

陣形術を覚えたい者は、10歳になると、どこかの家の弟子になることでその家独自の術を覚え、何か仕事をしていくようになっていきます。

軍に入るもよし！冒険者もしくは旅人になって世界を回るもよし！

我が家は、弟子の人達にとって第二の実家の様なもの。

屋敷のすぐ隣には、寮の様な建物もあり、そこで生活している人もいるんです。

普段は、この屋敷で働いている人しか居ないのですが、学校の方に建っている寮に入っている学生の人達が、休みの間だけ屋敷の隣にある寮の方に泊ったりするそうです。そして、訓練と勉強をしています。

まあ、学校に行かない人もいるそうですが。

名家である我が家には、優秀な術者がかなり居ます。

名家の名前は伊達じゃないんですね。

自分が死にそうになるたび、十数人がかりで回復専用の術をかけてくれます。

大人になれば小さい体では耐えきれなかった力も平気になってくるそうです。

前世よりまし………なのかは疑問ですが、気にしたら負けだと思うので考えないようにしてます。

そんな思想の中に浸っていると声が聞こえて意識を浮上させる。

「あら？リシル今日は体の具合大丈夫なの？」

ベットの上で上半身だけ起こしていたリシルは声の主の方へ顔を向ける。

「はい、母上今日は久しぶりに調子が良いです」

この話しかけてきた人は、メリアナ・メル・リバメンスと言い僕の母親。白銀の髪と藍色の目をした人で、子持ちとは思えない位若く美しい人だ。

そして、僕の名前はリシル・ルノ・リバメンス

僕も良く《小さくてこれだけ綺麗何だから、将来は見た事の無い位の綺麗な人に成るだろうな。》とか言われるがお世辞だろうと良く流している。

あと、リバメンス家は有名なんだそうです、………ちょっと半信半疑でこの話を聞きました。

兄が二人、姉が三人居ます。とはいってもその中には従兄妹も混ざっています。兄が一人、姉が二人です。

父の弟であるハンジ叔父様とその奥さんであるマリネ叔母様が事故お亡くなりになられたので、引き取ったんだそうです。

「後で、お父様が来るそうよ。良かったわねリシル」

にこにこ言ってくる母に、子供らしいであろう笑顔を母に向け答える。

「はい！最近忙しそうで会えなかったので、嬉しいです！」

「うふふふ」

これが家で良くある風景である。

第一話（後書き）

間違いを指摘して下さい
× 3
た方が居たため、修正させていただきました

第二話 侍女編

「リシル様、体の調子が良いからと言って無理をしてはいけませんよ！」

私は、リシル様の専属侍女をしている者の一人で、リティー・メーベルンと言います。今日のリシルはいつも以上に体の調子が良いらしく、庭に出る許可がおりたので庭に出て来ています。

そして、私はそのお供です。

他にも、私と一緒にリシル様の専属護衛の方がお供をしています。

名前は、フェルマン・イスマールさん23歳。

「そうです。気を付けないとまた寝込む事になります」

この方は沢山のお弟子さん達の中でも、トップクラスに入る方で、顔も整っていて誰にでも気さくな方なので、侍女だけで無く、貴族のお嬢様方にもとても人気のある方です。

そして、この家の中でもトップクラスと言う事は、世界中でもトップに入り込んでいる方とも言えます。

リバメンス家は、世界中でも注目を集める程の名家です。

でも、何故こんなに凄い方が護衛を買って出ているのだろうか？と少し前に思った事が有り、聞いてみた事が有ります。

国の軍に入れば、かなりの地位まで行けると思っんですよね。

そして、質問の答えは明快でした。

《リシル様に惚れたから。》

だそうです……………恋愛感情の方では勿論ありませんよ。

以前、リシル様がかなり大きい力を暴走させてしまった時、周りに被害が及ばないよう、必死に周りの皆さんで抑え込もうとしていたのですが、丁度その日は里帰りや、王都に行っていた方が多く欠員だらけ、数人の術者と修行中の者たちだけしか居ない状態だったんです。

全員参加でもリシル様の膨大な力を押え切れず、もう駄目だと言う時にリシル様は自分自身でその幼い体では膨大すぎる力を押えこんだんです。

リシル様は4歳になれる少し前……………これは凄い事です。大人でさえ力が暴走してしまうと周りが押さえ込むまで止まらない事が圧倒的に多いですからね。

だから、魔形術の資格を持っていない人が術の練習をしたりするためには、ちゃんと資格が有る人の監督付きで無ければならないと、国の法律で決まっています。

資格とは世界で唯一発行している神殿で試験を受け、受からなければもらえない物です。

その中でも、上級の1位2位3位・中級の1位2位3位・下級の1

位2位3位と分かれていて、上級の1位に限っては世界で5人しかいません。

ちなみに、リバメンス家の長男であるレオナル・ディア・リバメンス様23歳は上級の1位です。

そして、イスマールさんは上級の3位です。レオナル様とイスマールさんは同期です

……少し話がずれましたが。

リシル様が力を押えこんだ時、緊急報告を受けたイスマールさんは丁度本宅に到着したんです。

それで、その光景を見た時思ったそうなんです《自分の仕えるべき人はこの人だ》って。

私も、その時その場に居ましたが……凄かったです。

そして、それを切っ掛けに惚れ込んでしまったイスマールさんは、一生リシル様に付いて行くことを決めたそうです。

男の人って良いですね……なんかそう言う所が。

「分かってるよ。二人とも心配し過ぎなんだから……」

リシル様の柔らかな声を聞いて、惚れ惚れする。

この家の方達は平民などを差別したりしません、たいていの貴族

の方々は自分達は選ばれた存在なんだと思い込んでいて偉そうにしているんです。例外な方もいらっしゃいますが……その貴族の方々と比べてリシル様はまだこんなに小さいというのに、私達を氣遣ってくれたり優しくしてくれます。ちゃんとお礼も言って下さいますし、自分に否が有る時はどんな人にも謝ってくれます。

こんな人に仕える事が出来て、私は幸せ者です……！

それに、リシル様は歳の割に大人びています。他の貴族の同い年の子供達は我儘放題だというのにです。……これは、旦那様と同行した時に行った貴族の館でリシル様と同い年の子を見た時見たんです。侍女達や兵士達がすごく大変そうだったのが、しっかりと印象に残っています。

……リシル様は、ベットの上で本ばかり読んでいたというのもありますが……体が弱いせいで、同い年の子に会った事が無いんです。周りには大人ばかりだと言う事も有るんだろうと思います。

「それに、久しぶりなんだから大目に見て？」

そして、嬉しそうにほほ笑むリシル様。

そのほほ笑みに、侍女を始めとし、お弟子さん達、リバメンス家に仕える騎士達、そして勿論の事リバメンス家の方々、皆メロメロなのです。

第三話 学校はお預け（前書き）

どんどん進んでいきたいです。

第三話 学校はお預け

僕は後一週間で6歳になります。

この世界では、皆六歳になると、王都にあるエレストーラ学院（小・中・高のエスカレーター式の学校、12年通った後残るか就職するか決める。残る人は2年間から最大4年間残れる。）に通うため学院の中にある寮に入ります。（他にもいくつか学校が有る）

科が4科に分かれているので、10歳になると自分で入りたい科を決めます。それまでは普通に小学校の様な勉強と一般常識を学びます。

陣形科に入る子は、皆何処の家に弟子入りするか決めて、その弟子入りした家が所有している寮（王都内にある）に移ります。そこには兄弟子達と陣形術の指南役の方々が居るので、そこで学校で習うのとは別のその家独特の修行する事になっています。（学校ではどんな家でも必ず出来ないといけない様な事を2年間やり、その後はかく弟子入りした家の独自の形で自由に勉強する。）

学院には、普通科・武芸科・陣形科・鍛冶科の四種類が有ります。生徒の数は毎年6千人近くの人が入学して、今は全生徒で9万2千人ほどいるそうです。

本当だったら僕も行くはずだったのですが、まだ体より魔力が大きいらしく、両親にまだ駄目と言われてしまい先延ばしになってしまいました。

体が大きくなり、魔力の方が大丈夫になるまで、実家の中で家庭教

師を雇い勉強する事になってしまいました。前世では学校に行く事が出来なかったので、早く大きくなって学校に行きたいものです。

そして今日は、この家に弟子入りしたい人たちが、入門試験的な物を受けています。

勉強は関係ありません。魔力の大きさを測り、個人面接を受けてOKを貰えた人は、この家の弟子だという証拠であるリバメンス家の紋章の入った銀色のピアスを耳に付けて貰います。

このピアスは、リバメンス本家の血筋の者（本家の血筋の者は金色で、これは何処の家もこれで統一されており弟子は銀、本家の血筋でも術を使えない者は金の指輪をしている事が多い）にしか取れない様な術式を施してあるので、無理やり取られて悪用される事はありません。このピアスを外すことになるのは破門された時のみです。

「おっ！どうやら全員の診断が終わったようですよ」

専属護衛のフェルマンが窓の外を見ながら言った言葉を聞いて、リシルも窓から外を覗く。

この屋敷の出入り口からぞろぞろと試験を受けたあちこちの学院の生徒達が出て来ていた。

「数十人以外は合格だったみたいだね」

受かった人と受からなかった人が良く分かる。苛立たしげに地面を蹴っている者、浮足立ってスキップしている者、落ち込んでいる者、満面の笑みを顔に浮かべている者。

皆大人にはまだ遠い歳だという事もあって、分かりやすい表情や行動している者が多い。

「そのようですね」

10歳の子供たちを見た後、リシルを見て、リシル様の方が年下なのにリシル様の方が精神的には大人だななんて思いながら答える。

「ねえ、フェルマン」

ふつと言い事を思いついたりリシルは窓の方に向けていた首を、フェルマンの方に首を向ける。

「何でしょうか？リシル様」

「ちょっと、外までに覗きに行かない？　どんな様子なのか」

勿論、父上や母上には内緒で！

良い事思いついた！　と言うような様子のリシルにフェルマンは苦笑する。大人っぽいのにたまに悪戯っ子の様な事を言う主に、まあ良いかと思いつながら体調を聞く。

体調が悪い時に外へ出て、次の日に高熱が出てしまっているのを、何回か見ているからだ。

「体の方は大丈夫ですか？」

「大丈夫！」

「では、少しだけですからね」

たまには良いかと。とフェルマンは肯く。

「うん、分かっているよ。今まで長時間外に出るのを許してもらった事無いしね」

心配症なんだから。と言うリシル。

「じゃあ、行ってみよう！」

あの人達の中に、将来一緒に練習する人が居るかも知れないしね」

そう言つて外に出るべく、歩きだすリシルの後をフェルマンは付いて行く。

今日の天気は晴れだが、この後大変な事が起こる事になるとはまだ誰も気付かない。

第四話 視線の先

「今日は晴れてて気持ちいいね」

「そうですね。ここまで天気が良いのは久しぶりです」

リシルとフェルマンは正面出入り口から外に出て来ていた。その周りには入門試験に来ていた生徒達が帰るための準備や、入門許可を貰えた者は説明などを受けている。

「ねえ、フェルマン」

リシルは面白そう…と言うより興味しんしんの様子で生徒達を見ていた。

幼い頃から部屋の外に出してもらえる事が余り無かったリシルは、当然の事、年が近い子供に会う機会が無かった。周りに居るのは大人ばかり、その中で一番若い者で18歳。

自分と年が近い子供たちが珍しいのだろう。などと思っていたフェルマンは、唐突に名前を呼ばれ、何だろうと返事をする。

「リシル様、何か気になる事でもありましたか？」

うーん、と唸ってから、こてつと首をかしげているリシルに如何したのかとフェルマンは聞く。

「何だか、視線が集まっている気がするんだ……気のせいかな？」

「気のせいでしょう。私が王都に使いで行く時もこのような感じで
すし」

「そっか」

気のせいか。と言って笑って居るリシルは気付いていなかった。フ
エルマンは世界でもあまり居ない若い上級陣形術者、しかも優しい
+ 美形。

世の中の女性達は放って置いてはくれないだろうと言う事に。未婚
女性達にとっては上級の優良物件。

そして、そんな優良物件は王都・他国に限らず……人前に出るだけ
で一身に注目を浴びる。女性達から獲物を狙う狼の様な眼、術者達
からは、憧れ・羨望・嫉妬の眼で。

若い頃からその容姿で注目を集めていたフェルマンは、上級術者
になりより加熱になったその視線に鈍感だったのに加え、馴れ過ぎ
たせいで、それが当たり前だと勘違いしてしまっている。

そして、なぜか前世の頃から周りに美形な人達が集まっていたせい
で、自分の周りに異常な程、美形が集まっている事に気付いて居な
いリシルは、あっさりとフェルマンの言葉に納得してしまっていた。

リシルは自分の家族と、一部の弟子達しかこの世界に生まれてから
見た事が無い。

そして、何故かその殆んどの者たちが平均以上の容姿を持っていた。
リバメンズ家への評判の一つの中に、こんなのが有る『リバメンズ

家の術者は美形が多い》……この殆んどは女性陣からである。

そして、リシルは6歳という年齢ではあるが、将来有望の美少年だ。兄や姉達が美形なせいで自分は平凡な顔をしていると思っっているが、十分以上に華やかな容姿をしている。

そして、そんな2人に注目が集まっているのは当然…必然とも言える。

しかも、リシルはこの様に人が多い場所に出たの初めてである…当の本人は気付いていないが。

リシルは有名だ。

名家である《リバメンズ家に、魔力が有り過ぎるために表に出られない末の子が居る。》と言うのは世界中でも認知されている程である。

普通魔力が暴走する時は、魔力を練り、その練った魔力で陣を展開した後、その陣を発動するための魔力をその陣に合った密度と性質を変換して流し込むのだが、その時の匙加減を間違えると関係の無い魔力が引きずられて無くなるまで放出し続けてしまう。魔力を放出し終わった後は、生命エネルギーまで放出し終わるまで止まらない。

その生命エネルギーを出し切ると、その術者の命は無い。

そして暴走してしまうのは大抵未熟な術者。だから、暴走の心配の無い術者が側で見張ることが義務付けられている。

魔力の使い方を学んでいない、しかも赤ん坊の頃から暴走してしまうような事は前例が無い。

そんなリシルは、気付かない内にこう言われるようになっていた《天才》《鬼才》その他もろもろ……

そして、この屋敷に幼い子供と言ったらリシルしか居ない。だから、試験を受けに来た10歳の子供たちにさえ気付いていた。

だから余計視線が集まる。

「今日は、レオ兄も帰って来るらしいよ」

「本当ですか？ レオナール様が本家に帰って入らっしゃるのはいつ以来ですかね」

「……半年ぶりかな？」

視線の先に居る二人はマイペースと周りの人達によく言われる。

第五話 リシルは有名

やっぱり、色んな色の子が居るな。

フェルマンが思っていた理由とは少し違うものの、リシルは試験を受けた子供達に興味を持っていた。

前世では絶対にあり得ない色が、花畑の様に今眼前に広がっているのだ……花では無く髪だが。

しかも、全部天然の色だ。この世界では《髪を染める》という概念が無いからだ。

前世の自分の居た所では、黒髪に黒目ばっかだったからだ。病院から外には出られなかったから、たまに見る外人さんと、テレビに出てくる外人さんくらいしか、自分とは人種が違うとはっきり分かる人は居なかった。

しかし転生してからと言うもの、周りには元いた所に居たお馴染みの色を持っている人は滅多に居ない。居たとしても片方だけが多い。

でも、転生してから余り沢山の人を見た事の無かった事もあったが、リシルは色んな色の髪や瞳を見れるのは結構楽しい。と思っていた。様々な色の瞳は、同じ色であっても色の濃さ等によって変わって見える瞳は綺麗だと。

黒目ばかりの場所に居たからこそその感覚ならではこそその考えかもしれないが、リシルに分かるはずもない。

「やっぱり、良いな」

そんなリシルを周りの者達とは少し違う目で見つめている者が数人
…リシルはまだ気付かない。

+++++

「ねえ！ あれってフェルマン・イスマイル様じゃない！？」

「え？嘘つどこどこ！」

初めに気付いたのは数人の少女達だった。その少女達が気付き、こそそこ話しては、一方に熱い視線を送っているのを見た周りの者達が『何だろう？』と、視線を送っている方向を見て気付き、また次の子達も…と少しずつ気付き始め、最終的には全員が気付き視線を送っている状態になっていた。

そして、皆すぐに隣に居る一人の幼い男の子を見つけた。そして皆直ぐに気付いた。この幼い少年こそが、リバメンス家でも飛び抜けて強い魔力を持って居たため、天才だと言われているレオナル・ディア・リバメンスをも圧倒的に凌ぐであろうとまで言われているリバメンス家の末の息子。

その魔力の大きさ故に、人前に入る事が出来ず、療養の様な生活を送っているのは、陣形術関係の者達にとっては当たり前的事であった。それは子供だからと言っても例外ではない。

リシルの存在を知って居ても、細かい事までは知らないというのは、陣形術に余り関わる事の無い一般の民くらいであろう。

各国の貴族や王族にとってこの事は一般常識になりつつある…そして本人はその事に、全く気付きそうにもない。

そして、この場に居るのは陣形術士の卵たちである。そうとなると、リシルの事を知らない者は居ない。どんな容姿を持っているかなどは全く知られて居なくとも、すぐ隣に術者としての階級が、上級の2位に上がる事が決まり、世間を騒がせている男が隣に控えているのを見れば分かってしまう事だ。

そして、皆が尊敬や憧れの視線を注いでいる中に、数人の少年が顔を合わせ、一人の男子を筆頭にして視線の中心の二人に向かって歩いて行く。

握手を求めるとか、そんな雰囲気ではない。

その眼に宿るのは嫉妬・怒り…そんな負の感情が眼に宿っている。

そして少年達は、リシルとフェルマンの4m程前に来ると止まり、怒りの表情をリシルに向ける

近付いて来ている事に、少し前から気付いていたリシルは、少年達の歩みが止まってから、ゆっくりとその少年達に視線と頬笑みを向け、話しかける。

「やあ、僕に何か用が有るみたいだね？」

そんなリシルに、少年達の一番前に立って居るといきなりこんな事

を言った。

「何でだ！」

第五話 リシルは有名（後書き）

感想ください！

でも、余りきつい事は書かないでくれると嬉しいです。

きつい事を言われたりすると、やる気が萎えて更新が伸びます。

あ、でも間違いや、可笑しな所を見つけたらじゃんじゃん教えてください。

何時でも待ってます！

第六話 少年達と銀色のピアス

止まってからの第一声はこれだ。

「何でだ！」

鼻息も荒くそう怒鳴ってくる少年を、フェルマンが一步前に出て止めようとするが、リシルは右腕をフェルマンの前に出し、止める。

そして『大丈夫だ』という意味を込めた視線で後ろに下がらせる。

それでも、フェルマンは少年達に鋭い視線を送っている。『手でも出そうとしたら子供でも容赦しない』と、無言で言っているのに気付けるのは、フェルマンの近くに良く居る者達だけだが、今日は残念ながら居ないので、気付く者は居ない。

そして、そんなフェルマンの思いに気付かないけれど、リシルは何故少年達が自分の元へ来たのかは、気付いていた。

本家の息子だと言う事を、少年達は分かっている。

少年達が此方に近付いて来ている時、リシルは先頭に立っている少年の耳を見ていた…そしてその少年の後ろに居る少年達の耳を順番に見る事で直ぐに気付いていた。

『ああ、試験に受からなかった子達か』と。

その少年達の耳には、リバメンス家の弟子になったという証の、紋章入りの銀色のピアスが付けられていなかったからだ。

そんな彼らが何故、自分を落とした家の息子の元へ来た…何か用が有るとしたら一つしか無いだろう。

そして、その少年達の先頭に立っている少年は、リシルが予想していた事をまくしたてる様に訴えて来る。

「何で俺達は駄目なんだ!？」

学院の選択科目が始まってから、直ぐに陣形術を選択して、術を使える様に練習して出来るようになったんだぞ？」

そんな風に怒鳴っている少年を前にしていても、リシルは頬笑みを崩さない。

実際リシルは約6歳+14歳だ、子供が怒って当たって来たとしても気にする事では無い。

そして、そのほほ笑みの下では、少年の言葉の端々から色々な情報を集めている。

どの学校でも、8歳になると自分で選択科目の中で、2つ選べる事になっている。

その選択科目で選んだ科目に合う科に、10歳になるとそのまま、大抵の子供達は入っていく。

その、選択授業では科目ごとに違う授業をして、その科目に合った基礎を教えて貰うのだが、その中でやはり、出来る者と出来ない者が出てきてしまう。

そうしてその中でも格段に出来なかった者が、その後《出来損ない》と言われてしまう事は多い。

そして、その中でも格段に出来る者は《期待の新人》と言ってもてはやされるらしい。

始めはこんな事は無かったそうだが、歴史が積み重なっていくたびに、この状態に成る学校が多くなって言っているそうだ。

「学院内の同年代の中じゃ俺が一番だったんだ！

こいつ等だって、そうだ！

他の奴らと比べたら、俺達の方が絶対上なのに……………！

何で…！

何で落ちこぼれのキールが受かって、俺達が落されなきゃなんねーんだよ？」

そう言つて、睨みながらビシッと、深緑色の髪をした少年を人差し指で指す。

その指されたおそらくキールと言う少年はビクツと、肩を跳ね上げる。そして震えているのをリシルは見た。

随分と酷く当たられていたのだろう。

そして、この少年が何故受からなかったのか……その理由を予想していたリシルは、その予想が的中している事を悟る。

こういう少年は、自分が一番だと自負している分、格下だと思っている相手に負けるのをひどく嫌う。

そして、この様な少年は先輩だったとしてもその態度を崩さず、学院などの寮内で生徒同士の対立の原因になったりする事が多い。『新人のくせになんだその生意気な態度は！』と先輩方と喧嘩するそ
うだ。

その証拠に、リシルは姉や兄から会う度に良く、色んな家が管理する寮で起こった内乱話を昔話のように聞かされた。

こうなると、巻き込まれてしまった生徒達も、騒ぎのせいで修行の方に身が入らず、成長する者たちも成長しない。訓練をするためには、正規の術者の監視が必要なのに、騒ぎの仲裁をするためそちらに人員を割かれてしまつが為に、訓練が出来なくなってしまうのだ。

だから、リバメンス家では人の心を読むのに長けている者（術を使う訳では無い）を選抜し、個人面接という場で、その者の本質を選抜された面接官兼試験官がじっくりと見て合否を決める。

合格の基準は、意欲が有る人や、人に迷惑を掛けたりするのを良しとしない人、はつきりとした自分を持った者……人を思いやれる人なら、魔力が少なからうと、魔力の使い方が下手だらうと落ちる事は無い。

魔力の大きさはあまり関係が無いのだ。測っておけば生徒達には怪しまれないので取りあえず測っているだけで、実際はその者の性格重視で決まる。

魔力は増やす事が出来るから、子供の内から『駄目だ』と決めつけるモノじゃ無い、と言うリバメンス家の方針から来るものである。

素直な物は伸びが良い。

逆に相手をおとしめる様な事や、自分より下の者をいじめる事で、自分は大丈夫だと考えている様な者は、成長しない。自分は大丈夫だと勝手に思い込んで訓練も真剣に取りくまない事が多いからだ。

だから、最後は自分より下だと思っていた者に追い越され、それをまた人の所為にして暴れたりする。

そして、どんどん酷くなっていき、その結果が《破門》

《周囲の者たちの成長を妨げておいて、結局破門にされる様な者は最初から入れない方がよい》

これは、初代当主の考えらしく、今でもリバメンス家には根強く残っている。

そして、性格重視で合否を決めてきたおかげで、他と比べいじめや差別などが少ない。

皆仲が良く、職場が離れていても良く皆で集まっていたりもするほどだ。

たまに、意見が合わず喧嘩になったりもするが、そんな事も稀だ。

そんな、事を知らない少年達はリシルに言い募る。

「試験官達が可笑しいんだ！あいつ等を依怙贖しやがったんだ！絶対につ？」

なあ、本家の息子が言えば俺達も合格させる事が出来るだろ？言ってやってくれよ！俺達が落ちる訳絶対ねーんだから？」

自分の事しか考えて無い。傲慢な性格が丸分かりな態度で言うてくる。

リシルは逆に『良くこんな態度で人に頼み事出来るな。多分お坊ちやんなんだろうな』と感心してしまう程だ。

でも、この事はしっかり分からせるべきである。そうしないと、入ったばかりの弟子達に嫌がらせをしてくる可能性もあるのだから。

「貴方達が落ちたのは事実だよ。試験官の方達は真面目で信頼できる人達にしか任せていないからね。絶対、依怙贖する様な人は居ないよ。言い掛かりを付けるのは止めてね」

そう、リシルは頬笑みを顔に載せたまま少年達を見回し、きっぱりと言う。本家の子供とはいえ、4歳位年下であろうリシルにはつきり言われた少年達は、怒りで顔を真っ赤にする。

「このっ…！」

「言わせて置けばこいつっ！」

「っのやろ！」

激情した少年達は暴言を吐こうとした瞬間、その言葉を遮る様にして、近めの所でこの話を聞いていた一人の少女が大声を張り上げた。

「良い加減にしなさいよ？」

第六話 少年達と銀色のピアス（後書き）

間違いを指摘して下さった方々、本当にありがとうございます。

気を付けては居るのですが…

細かい事は気にしたら負けだ！

……と言う不屈の精神で、必死に頑張っていくので宜しくお願いします。

誤字・脱字を指摘された場合は、速やかに修正させていただきます。

第七話 少女乱入

「いい加減にしなさいよ？」

その怒声と共に乱入してきた少女は、リシルと少年達の間に入ると、少年達の方を向き、怒っているのがはつきり分かる声を出す。

「さつきから聞いていればっ！」

少年達の方を【ギンツ】と睨むとまた怒声はその口から飛ぶ。

「あんたたち恥ずかしくないの！？俺が落ちたのは試験官の所為だ？ふざけてんじゃないわよ？」

あんた達が落ちたのは自分の所為でしょ！ 人の所為にしてんじゃないわよ？

しかも、こんな年下の子に暴言吐こうとして……！ 恥を知りなさい？」

リシルが『この子誰？』と思いキョトンとしていると、どうやら知り合いだったらしい先頭に居る少年声を上げる。

「何言ってんだメイリン！ 俺が落ちる訳ないだろ！ 学年トップだったんだ！ お前は俺より下の2位だった！ それに、落ちこぼれのキールですら受かってんだ！ お前等が受かって俺が落ちるなんておかしいだろ！？」

「なに馬鹿なこと言ってんのよ！ リバメント家は魔力の大きさとかだけじゃなく、他の事でも試験で見てるって言うのは皆知ってる

事でしょ！ 貴方が落ちたのは魔力云々とかじゃないわっ！
だから、そんなの関係無いでしょ！」

リバメンズ家の試験を受ける者達は、皆この暗黙のルールを知っていた。少年も例外ではない。

その事を知っていた少年は、本当の事に言い返す言葉が無くなり、グツと押し黙った少年に続けてメイリーンと呼ばれた少女は言う。

「貴方は落ちたの！ この事実はどうやっても変えられないわ！
ちゃんと認めなさいよ！」

押し黙っていた少年は絞り出すように反論する。

「俺のプライドにかけてそんなことは認めねえ……！ これじゃ負けるのと一緒にだ？」

睨みながらもそう言う少年にメイリーンは、ぱつさりと言い捨てる。

「何言ってるのよ！ そんな大人数で年下の男の子一人に押し掛けて置いて、そんな事言える立場じゃ無いでしょ！ そんな軽いプライドなんて、有って無い様なモノよ！」

メイリーンの言葉に、周りで成り行きを見ていた少年少女達が『そうだ！ もつと言ってやれ！』と言う雰囲気の流れ始め、少年達には非難を思いつき含んだ視線が突き刺さる。

先頭の少年以外の子は、正当な事をはっきり言われ視線を泳がせていたが、非難の視線が刺さり始めると、それに耐えきれなくなつた少年が、そのうち1人2人と散って行き、最後には、先頭に居た少

年と普段から取り巻きをしている少年達しか残っていなかった。

しかし、最後まで残っていた少年達だったが、周りからの非難の視線が強くなり、負けを認めざるならない状況になって。

「……………っ……………くそっ！……………覚えてろよ……………っ！」

ついに耐えきれなくなった少年達は、悪態をつくと散る様に去っていく。

ふんっ、と腕を組み鼻を鳴らす少女にリシルは声をかける。

「…えっと…メイリーン……………さん？」

「……………は、はい！？」

いきなり後ろから声をかけた所為で、驚いて声を上ずらがせながら返事をしたメイリーンに、リシルは頬笑みでは無く、笑顔を向ける。

「ありがとうございます。貴女のおかげで助かりました。」

今までで初めて見るような美少年の笑顔を真向に向けられたメイリーンは、呆けた顔をしたが、はっと気付き慌てる。

「……………っは！？ い、いえいえそんな！ お礼を言われるような事では……………！」

メイリーンは大勢の少年達相手に啖呵切った少女とは思えない位、顔を真っ赤にして慌てている。

そんな、挙動不審なメイリーンをどうしたんだろうと首をかしげて見ていたリシルだったが、肩を トントン 優しく叩かれ、叩かれた方を向く。

「リシル様そろそろ部屋に戻られませんと……」

フェルマンのその言葉に『しょうが無いな』と頷くと、メイリーンの方へ顔を戻す。

「メイリーンさん」

「は、はい」

「本当は、ちゃんとお礼したかったんだけど、そろそろ部屋に戻らなければいけなくて……御免なさい。」

「いえいえ！ 私が勝手にしただけですし！」

あわあわ、としているメイリーンにリシルは苦笑する。

「僕の方が年下ですから、敬語なんて使わなくて良いですよ？」

その言葉にメイリーンは『とんでもない！』と首を振る。

「本家のご子息にそんなこと出来ません！」

「僕は気にしないんですけど……」

「リシル様そろそろ……」

「分かっているよフェルマン……メイリーンさんちよつと」

そう言つて、リシルはメイリーンの手を取る。

「な、何……？」

おどおどしているメイリーンに落ち着いて、とほほ笑むとリシルは術式を発動させる。

「……え？」

青色の陣がメイリーンの手の平の少し上に現れ、光ったと思った瞬間……そこには……

「青い……薔薇……？」

メイリーンの手の上には、瑞々しい青い薔薇が残っていた。

術を使うには、想像力が必要なため、この世に存在しないものは作れない。

そして、この世界に青い薔薇は存在しない……

メイリーンが茫然としている内にリシルの姿は忽然と消えていた

「くそっ！ あの餓鬼……覚えてろよ！」

少年のこの言葉を聞く者は居ない。

番外編 7・8 (前書き)

閑話入れてみました

私達女子一同は、同じ学院の生徒である男子達とその他の試験に受からなかった男子達が、リバメント本家の末の息子であるリシル様に突っかって行くのを、

『この馬鹿共何やってんの？』

と言った感じの冷めた目で見ていた。

自分の記憶では、リシル様は確か6歳になる少し前だった筈だ……私達は10歳。

『自分より4も年下の相手に、あんな人数で行くなんてどんな神経してんだ……恥を知れっ！』

……正直なところ、女子一同どころか、あの男子の中に入らず見ているその他の男子ですらそんな風に思っていると私は思う。

しかも、私は比較的近くに居たので声もはっきりと聞こえ、ますますその思いが深くなっていった。

男子達は、子供が友達と喧嘩して、むきになっている様に見えない位幼稚だ。

それに比べ、リシル様は、とてももうすぐ6歳だとは思えない。

年上の人があ的人数で怒鳴ったりしに来ても、まったく取り乱した

りしてない。

どっちかと言うと、男子達の方が年下の様に見える位落ち着いていて、大人が子供の相手をしているようだ。

私は、あの年であんな風にはつきりとは、絶対に言えなかった。

自分より年上の人達に囲まれて、あんなにきつく言われたら、黙り込んで、何も言い返せずに終わってしまうだろう。

もっと悪ければ、俯いたまま泣き出してしまうかもしれない。

私は、リシル様の事を純粹に凄いと思った。

その一方、男子達は、リシル様にはつきり否と言われて言葉に詰まり、暴言を吐こうとし始めているのを私は見て情けないと思った。

男子達が負けたのを認めないのは、男のプライドとか言うモノだろう。

男子達が喧嘩する時良くこう言う『男にはプライドって言うもんがあるんだ？』

……確かに私だって譲れないもの位有る。

でも、あんな年下の子相手に大勢で行っておいて、プライドだ何だ言う資格無いと思うんだ私は。

しかも、その年下の相手はどう見ても男子達より落ち着いて、物事を見ている。

流石の私も、頭の血管が【プチっ】と切れた。

私は周りの友達から『怒った所見たこと無い』と言われる位怒る事が少ない。

あんまり何か酷い事言われても、あんまり頭にきたりしないからと言うのも有る。

でも、あれは酷い。

見てるのも我慢の限界。

しかも、平和主義の私ですら『あいつなんで偉そうなの?』と良く思っていた男子が先頭だ。

……と言うより、同じ学校の同学年の女子のほとんどが思っていた。

堪忍袋の緒が切れた私は、無意識のうちに大声で怒鳴っていた……
勿論男子達に

「いい加減にしなさいよ?」

つつい出て行ってしまったメイリーンは、その後リシルにお礼を言われ、慌てていた。

メイリーンより年下とはいっても、身分は遥かに上……雲上の人に
お礼を言われたのは初めてだったのだ。

しかも、今まで見た事が無い位顔が整っていて、将来かなりの美形になるだろう顔に笑みを向けられ、メイリーンは呆けた顔をしてしまった。

それに気付き、はっと顔を赤くしてしまった時、護衛役をしている
であろう、後ろに控えていたイスマールがリシルに耳打ちをした。

耳打ちされたりシルは、残念そうな顔をしてメイリーンに『もう戻
らなければ』と言った。

そして、お礼と言われ手をつかまれた時メイリーンは『何事！？』
と思っておどしてしまっただが、リシルはほほ笑むと、術式を一瞬
で発動させた。

それを見た時、自分の目を疑った。

術式を一瞬で発動させる。これは6歳位の子が出来るような事では
無い。プロの術者でも決められた呪文を唱えたり、媒介を使わな
ければあの速度で術を発動する事など出来ない。

出来るとしたら上級の術者………

間違っても、6歳の子供に出来る事では無い。でも目の前の少年にも成りきれていない子は平然とやってのけた。

しかもその術式を発動させ、作りだしたのは青い薔薇。

植物は、種から大きくしたりするのは難しい事ではないが、何も無しで作り出すのは難易度がかなり高い。

17歳になって教わり、出来る者と出来ない者が出て来る程だ。繊細な技術と魔力の微量な調整が必要となる。

出来ても、見た事が無い・この世に存在しない花や植物は作りだすことは不可能と言われている……が……

青い薔薇を呆然と見つめていたメイリーンに、見世物は終わったか？　みたいな感じで、メイリーンの親友であるレナが近付いて来て声をかけてきた。

「やゝ、凄かったね。初めて見たよ小説とかに出てきそうなシーン……って、メイ？　どうしたの、そんなに固まって……って何それ！？」

普段からお気楽のレナも、流石の事に驚いたらしく呆然としていた。

「……リシル様にお礼って言って貰った……」

「も、貰ったって……さっき光ったのって陣形術のだね……？」

メイリーンがコクつと肯いたのを見て、

「その薔薇……術で作り出したとか……言い出したりしないよね……」

「……そのまさかよ」

「……冗談きついなも〜！」

そう言ったレナだったが、いつも以上に大真面目な顔をしているメイリーンに顔を引きつらせる。

「本気と書いてマジと読む……ってやつ？」

「……私達、凄い人が居る所に弟子入りしたね」

そう、戦々恐々と言うメイリーンに、レナが言えたのは一言だけだった。

「……そうだね」

数年後この二人は、またリシルとの邂逅を果たす事となる。

第八話 兄帰還（前書き）

ちよつと更新遅れちゃった

……いや、理由はありますよ！

嘘じゃないっす！

テスト勉強と言うモノが有るんですよ！

一応学生なんで…ね？

第八話 兄帰還

「リシル様：術を使うのは出来るだけ控えてくださいと、何度言えば分かるんですか！

いくら暴走しなくなったとはいえ、魔力を使いすぎると、またベツトの上の生活に逆戻りですよ」

屋敷の中に有るリシルのお自室に、戻るための道を歩いている最中、リシルはフェルマンからネチネチと説教じみた言葉を聞かされていた。

その言葉を永遠と聞かされているリシルは『もう慣れました』とばかりに平然と聞いているため、一向に効果が有るとは思えない。

「分かってるよ。

でも、たまには使つとかなないと、いざ術を使う時に感覚を忘れて暴走……なんて事になったら困るし、ね？」

反省の色が見えないリシルに、諦めムードが漂っているフェルマンは力なく言う。

「ね？つでは有りません。

いざって事が無い様に私が護衛について居るんですよ……全く、リシル様は危機感が無いんですから」

ここで丁度リシルの自室に着き、フェルマンは早くベツトに戻るように促す。

「あー、はいはい。

ね、レオ兄がそろそろ帰って来る時間かな？」

「……そうですね。」

午前中には戻って来るらしいですから、そろそろ到着するのでは？」

今日は、リシルの兄であるレオナールが帰って来る日である。レオナールは国の軍に入っており、しかも王立陣形騎士団・第一段団隊長をしている。隊長と言っても現状は、王立陣形術士団と王立陣形騎士団の総隊長をしているようなものだ。

王立騎士団もあり、そちらは違う隊長が居て、本当はそちらが総隊長的な立場に居る筈だったのだが《陣形術の事は専門外だ》と言い、騎士団とその他の兵たちは普通に指揮しているのだが、陣形術士団と陣形騎士団の方はレオナールに丸投げしてしまっている。

しかも、つい最近まで隣国とのゴタゴタが有った事も有り、休み返上で仕事をしていた。

ゴタゴタの方は何とかなったのだが、後始末が大変だったそうだ。

やっとヒマが出来たそうで、半年ぶりの帰宅である。

「レオ兄元気かな？」

「大丈夫ですよ。レオナールは無駄に丈夫ですから」

ベットの上で上半身だけ起こした体勢で、窓の外…門が有る方を見ているリシルに、フェルマンが急かす様に言う。

「さあ、少しでも良いから寝てください。レオナールが到着したら

起こしますから」

さあさあ、と言ってリシルをあお向けにたおし、布団をかける。

「分かったよ。

でもちゃんと起こしてね」

しょうが無いっか、と言う風にリシルは眼を瞑る。

そして、久しぶりに外に出たのと陣形術を使ったのも合いなって、あっという間にリシルは眠りに落ちた。

「……………さ……………お……………ル……………おき……………リシ……………様……………
……………お……………てくだ……………リシル様起きて下さい」

「……………うん？」

自分を起こそうとする、微かな声が聞こえ、眠っていたリシルの意識は浮上した。

「おはよう。どの位寝てた？」

眼を擦り、まだ眠そうな様子のリシルは、フェルマンに視線を向ける。

「2時間程です。」

レオナルが帰って来たようです。先程、門が開いた音がしたので間違いないと思います。」

この言葉を聞き、起きたばかりで回っていなかったリシルの頭が、一気に覚醒した。

「本当!？」

そう言つて、リシルは飛び起き、窓を開け放ち、小さな体を乗り出して外を覗く。

そんな嬉しそうなリシルを見て、フェルマンはほほ笑んでいる。

しかし、はっと何か思い出したような顔を見ると、慌てた様子でリシルに注意する。

「リシル様!レオナルが窓の下の所まで来たとしても、窓から飛びお「レオ兄来た!」何!？」

フェルマンの声にかぶさるよう言葉を発しながら、リシルは窓枠の上に飛び乗り、その上に乗ったまま立ち上がる。

丁度、レオナルが護衛役であろう、二人の男女を後ろに従え、馬に乗ったまま此方に近づいて来る所だ。

そして、リシルが居る窓の下の所まで来ると、レオナルが馬を止

め、リシルが居る上方を見上げる。

従えている男性と女性は、怪訝そうな顔をしているが、気にしている様子は無い。

レオナルドの唇が、単純な言葉を発する時の動きをする。

その言葉は……………《来い》……………。

そして、それを見た次の瞬間、リシルは

空中へとその身を投げた。

簡単に言うと、窓から外に飛び降りた。

「ま、間に合わなかった……………」

フェルマンの絶叫をリシルは聞き流し、リシルはある“術式”を発

動させる。

術式を使う時に現れる光り輝く陣が一瞬浮かび、

消えた時には、リシルの背中に

銀色に輝く一対翼が現れる。

「れーーーーおーーーーにーーーーいーーーーー!!」

そう叫びながら、背中の翼で威力を弱めながら落下してくるリシルを、レオナールを両手で受け止める。

その瞬間、リシルの背中に有った一対の翼は、光の粒子がはじける様に幾つか舞っている羽を除き消えていく。

そして、舞っていた羽も、地面に落ちた瞬間、翼と同じく光の粒子となって消えていく。

「リシル元気そうだな。安心した。」

「レオ兄もお元気そうで何よりです!」

そのまま、平然と【何も有りませんでした】とでも言う様に、嬉し

そうに、喋り始める兄弟を見たまま、男性と女性は固まっていた。

やっと動けるまでに回復したその2人の第一声は

「」
「.....はい.....?」
「」

まともに喋れる様になるまで、時間が必要みたいです。

第九話 兄の決意（前書き）

体育祭…嫌あだああああ——！！

第九話 兄の決意

「リシル様、何度言ったら分かるんです。今日だつて言つたばかりでしょうに……」

窓から飛び降りるなんて事をしでかしたリシルは、すぐさま外へ出てきたフェルマンに説教をされていた。

今度は、小言の様な物ではなく説教だ。

芝生の上で正座をさせられ、30分ほど終わる気配の無い説教が、休むこと無く続けられている。しかも、今回はフェルマンだけでは無い。

「良いですかリシル様！」

窓から飛び降りるなんて事してはいけませんっ！万が一落ちた時の事を考えてください！」

この言葉を言ったのは、リシル専属侍女のリティー・メーベルン。フェルマンを慌てて外へと飛び出していくのを見て、すぐさま状況を理解し、フェルマンを追いかけて来たのだ。

「そうです。前回も、前々回だつて言つたでしょう？」

「そうです！3回目ですよ！」

フェルマンは、額に青筋を浮かべながら仁王立ちで立っている。いつもは穏やかな表情も今日に限っては、眉間にしわを寄せられている。

リティーは、少し前へ曲げた腰に手を当てている。いつも笑顔の顔も今は笑顔は無くなっており、怒りの所為か、顔が若干赤くなっている。

そんな2人を見ながらも、全然こたえていないリシルはいつもと変わる様子は無い。2人の言葉を聞いてるんだか、居ないんだか分からない表情で空を見上げている。

「2人ともそれ位にしたらどうだ？」

2人の長々と、しかも密度の高い説教を聞いていたレオナルが、唐突に口をはさむと、2人は息ぴったりレオナルの方を振り向く。

「何言ってるんですか!？」

レオナル様が原因ですよ!リシル様がこんな事をするようになったのは!」

「レオナルは黙ってて下さい」

そう、レオナルの言葉を一刀両断にすると、リティーとフェルマンは、リシルの方へと向き直り説教を再開する。

そんな2人に苦笑しながらレオナルはひとり言の様に呟く。

「相変わらず、あいつ等は心配性だな」

そんなレオナルに、護衛役として付いてきた、緑の髪に山吹色の瞳をした男性ビル・ウエスト「20」と、レオナルの補佐役をし

ている、金髪碧眼の女性ユメルダ・ミュール「26」は、やっとまともに喋れるまで回復し、まだ信じられないという風にビルは、レオナールに声をかける。

「隊長先程のは一体……？」

ちよつと恐る恐ると言う風に聞いてくる自分の部下に、平然とレオナールは答える。

「陣形術だが」

「……………ですよね」

あつさりと言われてしまったビルは、遠い目をしながら心の中で「現実って恐ろしい」と何回も唱えている。

リシルの使った陣形術は、普段から色々な陣形術を見ている2人ですらも見た事が無い類の術式だったからだ。

普通、空を飛んだりする場合は、翼竜やペガサスなどの魔獣を使用する。間違つても、自力でなんて事はしないものなのだ。

「目がおかしくなった訳じゃないのか…」なんて事も考えているビルを見ながら「分かる…その気持ち分かるわ」とても言うような視線を向けていたユメルダは、リシルへの説教を聞いて居た時に思つた事を、レオナールへ言う。

「あの《三回目》と言うのは？」

そう聞いてきたユメルダの方に一回視線を向けると、またリシル達

の方へ視線を戻し、懐かしそうに目を細める。

「そうだな……リシルが4歳の時だったな一回目は。あの時はまだリシルも、魔力の暴走を良くしていた時だった。俺が久しぶりにこっちの屋敷に帰って来た時、たまたまりシルは窓際に立っていてな、俺は声をかけたんだ。そうしたら、リシルは気付いて窓の下を見た。」

「……それが落ちるのと、どう繋がるのです?」

「俺は馬に乗っていたんだその時。リシルは馬を見るの初めてだったように、興味をかなりそそられた様で、窓から身を乗り出したんだ。そうしたら……」

そこまでレオナルドが話すと、2人とも分かった様で、リティーが結論を言う。

「……落ちたと」

「ああ」

子供は、体より頭の方が重いからな。と言って、その続きを話す。

「その時に発動したのが、あの陣形術だ。初めて見た時は流石に驚いた。」

……まあ、使った後は魔力の暴走で大変な事になったが。その後、何回も実家には帰ってきてはいるが、そんな事は一度も無かった。

だが、半年前帰って来た時、初めてリシルは自分の意思で飛び降り

てきたんだ。

その時は暴走しなかった」

そこで一旦、言葉を切るとリシルを見つめながら、思いはせる様に話す。

「その後、今まで無かったのに何故かと思ってな。

リシルの行動を見て、色々考えてみたんだ。

それで気づいた、リシルは自分の力をどこまで使っても大丈夫なのか、自分の限界を謀っているのだろうと」

「…そんな事、本当に考えているんですか？

確か、もうすぐ六歳と言っても、実質五歳でしょう？難しいことなど考えてい無いのでは？」

信じられないと言うユメルダに、レオナールは言う。それはリシルの事を幼い頃から知っている者にしか分からないと。

「リシルは、昔から子供らしくなかった。幼い子は、良く泣き、考えなしの行動をして、大人達を困らせたりするが。

リシルは、無く事が昔からほとんど言っていない程なかった。赤子の頃は兎も角、自分で行動できるようになってからは特にな。

リシルは周りの者たちの事を良く分かっている。

自分が、魔力の所為で体調を崩したりすると、周りの大人達が必要以上に心配する事もな。

だからこそ、使う機会が有る時になるべく使い、いつも自分の限界を探しているのだろう」

そう言うと、レオナールは獲物を探す猛禽類の様に眼を光らせる。

「いざという時のためにな」

《いざという時のため》という言葉を使った時の、レオナール眼を見た2人は、背筋に悪寒が走るのを感じた。

この二人の上官であるレオナールは、余り感情を外に出す事が無い。

先程の、穏やかな、慈愛に満ちた眼でリシルを見ていた事にも驚きだったものだ。普段は無表情が多い。しかし、この場所で見えるレオナールは、2人の眼には別人に映る。

余程、弟が大切なのであろう。

そして、捨て置けない言葉が有る。

「《いざと言う時のため》とは？」

ユメルダの言葉にも少し力が入る。

「リシルは、

いつも、暗殺者に狙われている」

これに、ビルは驚きを示す。

「暗殺者っすか…！　しかし何故？」

「脅威になるからだろう。」

この国には、優秀な陣形術者が集まっている。

一国に上級術者1〜3位で、5人程が普通だ。しかし今現在この国には13人も居る。

しかも、その内2人は1位だ。これから上がるのではないかと言われている者もいる」

そう言つて、ちらりとフェルマンの方へと、一瞬だけ視線を流す。

「今でさえ、力が一国に集まり過ぎているのに、史上最強の術者になるかもしれない子供が居る。

これ以上、力を付けさせてたまるかと思っている他国の暗殺者が、かなり頻繁に来ている。

まあ、皆返り討ちになっているが……」

はあ、と溜息を吐く。

「最近分かった事なのだが、暗殺者の中に、この国の者に雇われている者が居た」

2人とも驚きに目を見張る。

「何故っ!？」

「リバメント家の事を、面白く思っていない者が居るんだろうな。そして、リシルはこの事に気づいている。」

「……話したのですか？」

「いいや。」

随分と前から気付いて居た様だ。リシルは殺気等に敏感でな…よく

感じていたらしい。

訓練もしていないというのに、良く分かったものだ」

「すごいっすね。

俺は、感じられるようになったの14の時っすよ。

それも、わずかしら感じられなかったですし、同僚の中ではかなり早い方っす」

ほえ、と驚いている部下を見ながら、レオナールはしっかりと言う。

「リシルは、周りが思っているより精神は大人だ。

しかし、それでも子供なんだ。守ってやらなければならぬ。

せめて、大人になるまでは……」

その瞳に映る強い決意は、誰にも変える事は出来ないだろう。

第十話 リシルの計画（前書き）

かなり遅れてしまった……！

なのに短いっ！

御免なさい？

……言い訳します。

部活の方で、文化祭の準備が始まりました。

最近帰ってくるのが遅くなりました……

しかもテストまで！？

何これっ！イジメ！？

文化祭が終わるまで……って言うか、部活の方が落ち着くまで、更新がかなり遅くなるかもしれません。

しかも急いで文章打っているので、普段から多い打ち間違いや、誤字が増えてしまうかもしれません。

感想の方も、ここ一カ月ほど読めていません。

時間に余裕が出来るまで、元から遅い更新が、もっと遅くなると思います。

申し訳ありません。

第十話 リシルの計画

結果的には二時間弱続いた説教も終わり、リシルは自室に戻って来ていた。

説教をされていた時は、リシルの体に何も異変は見られなかったのだが、自室に戻って来て直ぐフェルマンがリシルの異変に気づき、体温を計った結果少し熱が有る事が分かった。

原因は、魔力を使いすぎた所為だろう。

一日は安静にしていれば直る程度のモノだったので、屋敷の皆もホッとしている。

酷い時には、内臓がズタズタになってしまったり、高熱が何日も続くななんて事も有るものだから、皆リシルの体調には、普段から気を張っているのだ。

そして、リシルは今、フェルマンが普段の日常の中で、何度も宣言していたとうり、ベット上の人となっている。

そのベットの中で大人しく横になっているリシルは、心の中で気落ちしたように溜息をついていた。

「もうちょっと、いけると思ってたんだけどな」

リシルは、布団の中で一人反省会をしていた。

もちろん、議題は『魔力をどの位まで使っても大丈夫なのか』についてである。

魔力の使える量は一年前と比べると、少しずつでは有るが増えているものの、体の成長とともに魔力自体の量も増えているため、変化があまり見られない。

……そうは言っても、同い年の子供達と比べれば圧倒的に使える量は多い。

と言うより、同い年くらいの子供達は魔力についてなどの事を教わっている頃なので、術を使えるかなどとは比べようもない事なのだが、リシルは同い年の子に会った事が無いので知らない。

「このままじゃ駄目だよね」

そう、初めて暴走してしまった時から思い続けている事を、少し沈んだ声で呟く。

しかし、これはどうにも出来ない。

体を急に成長させることなど実際出来る筈もなく、時の流れに任せられないのだから。

しかし、ずっとベットの上がりばかりではまずいのだ。

少しまずいのではない、

かなり…とてもまずい。

前世では、ずっとベットの上に居たからこそ良く分かる。……と言
うか、同じ境遇の様な人を見て育ったせいで良く分かるのだ。

このままでは、モヤシになってしまう。

ベットの上の生活では筋肉をあまり……いや、全く使わない。

着替えなどすべて使用人がやってくれるからと言つのも有るが、動
くと怒られるというのが一番の理由である。

そして、この体を普通の人々と同じように動いても大丈夫な様にす
るには、貧弱な体では駄目なのだ。

貧弱な体では、大人になった時体内の魔力に耐えられるか分からな
い。何しろ増えているのだから。

それに、体を動かさないと体の成長も遅くなる。

体の成長が完全に止まるのはまだ先とはいえ、魔力の成長がどこで
止まるのか分からない今、出来るだけ体を鍛えておきたいと、リシ
ルは考えていた。

だが、外へ出る時はフェルマンが付いてくる。そうなると運動する
などもつての外だと言って、自室に連れ戻されてしまう。

室内に居ても、フェルマンが扉の前で控えているし、メイドさんも
良く出入りするので、例え抜け出せたとしても直ぐ見つかってしま
うだろう。

そして、その次の日から護衛が増え……下手をすると見張り役が付

くかも知れない。

これでは悪循環だ。

そうなると、部屋への出入りが無く、有る程度自室内に居なくとも
ばれない時間帯……

そう、夜皆が寝静まった時間帯しか有るまい。

流石に、この時間帯まで部屋の中を出入りする者は居ない。

しかし、夜間でも警備兵は交代で当番をしているので、自室のドア
から出るのは不可能。

万一出れたとしても、玄関から出るのが無理なのでリシルは考えた
のだ。

ドアが無理なら窓から、と。

この計画に使う陣形術は、もちろんあの翼を出す術だ。その術あつ
ての計画とも言える。

しかし、今はまだ出来ない。

魔力を使える量を考えればの事だ。

飛び降りるだけならば出来そうなのだが、また部屋まで戻って来れ
なければ意味がない。

無理をすれば出来ない事もないが、そのせいでまた熱が出れば、怪

しまれてしまっ。

ばれればこの計画はもう使えないのだ。

今日の事で、この計画を実行するにはもう少し時間がかかる事分かった。

リシルは、後一年ほどすれば実行できるだろうと目星を付けた。

「早く大きくなりたいな」

寝る前にいつも呟く言葉、

切に願うように呟くこの言葉を、リシルは今日も呟きながら眼を瞑る。

こうして、リシルのいつもより忙しい一日が終りを告げる。

番外編 天才って居るもんだ（前書き）

やっぱ遅くなった……

なのに本編じゃ無くて番外編……

自分って本当に使えない……

くじけそうデス。

番外編 天才って居るもんだ

「今日は驚くような事ばつかでしたね」

「そうね…隊長の弟さんがあそこまでとは思わなかったわ」

この声の主である2人組は、レオナールが連れてきたビルとユメルダである。

この二人はあの騒動の後、与えられた自室に先程まで居たが夜風に当たろうと中庭まで出てきた所、ばったりでくわし、せつかくだからと話していた。

話の内容は《隊長の弟》だ。

「そおつすね。この業界で《天才》とか《鬼才》とか言われてるのは納得です。

最近の一般市民の方じゃ、『姿を出せないのはただ単に体が弱いだけだ』とか『ただの引き籠もりだ』とか言う奴も出て来てますし、同業者の方も『体質の所為ってだけで、魔力の量がそんなすごいってわけじゃ無いんじゃない?』とか言う奴居たんで……そこまででも無いと思ってたんですけど……」

「……確かにそうね。陣形術関係じゃない人達は情報なんて入ってこないだろうし……同業者でも何時暴走したとか瀕死状態になっ

たとか、嘘か本当か分からない情報をたまに聞くだけだからね。
……でも流石にあれほどとは……予想以上だね。まあ、見た人に
しか言えない感想だけだね」

天才って居る所には居るもんなのね」と、溜息を吐くユメルダに、
ビルは首を縦に振って同意している。

「あの歳で新しい術式を作り出し発動する……しかもあの術、生半
可な力量じゃ出来ないわよ。

魔力の量だってかなり消費するわ。あれ、下級の術者じゃ全然魔
力が足りないだろうし、発動まで持つてけるかどうかも怪しいわ……
。中級の術者なら発動させるだけならぎりぎり出来るか出来ない
かってところかしら？」

あー、なんて術式……そしてあの術式をしっかり発動して飛ぶだけ
の魔力を使っておいて、まだまだ使えない魔力の方が多いだなんて
……神様ってホント不平等だわ。

的な事を呟きながら、若干遠い目になっているユメルダをビルは見
ながら一言言っ。

「同感です」

何故か神妙な顔で返答をしたビル。そしてその返答を聞いたユメル
ダは、寄りかかっていた壁から背を離すと仁王立ちになり夜空を見
上げる。

ちなみに今日は綺麗な満月だ。

そしてビルは、『あれ？ 何かまずった？』

と、仁王立ちになったユメルダを青くなった顔で見つめる。そして、その顔は若干引きつっている。

ビルは、隊の中でユメルダと同期の先輩に聞いた事があつたのだ『ユメルダは、仁王立ちになる時とんでもない事を言い出す事がある』と。

自分自身でも一度体験している。

ヤバイと思つての後の祭り。

「まあ、神様なんぞに不平等だ何だ言つても仕方がないわ！ 天才つてわけじゃ無くても、陣形術以外で補^{おぎな}えばいいのよ！」

そして、握り拳を作るとそれを夜空を吹っ飛ばそうとするかの如く、空へと勢い良く突き上げる。

「何だか分からないけど、やる気が出てきたわ！
自分より年下に負けるなんて何だか癪^{しゃく}だし……王都に戻つたら隊の訓練増やしましょう！」

天才なんて追い越すぐらいに鍛えるわよ？」

一瞬停止した思考を、ビルは必死に動かす。

そして出た結論を反射的に言ってしまう。

「いや、姉さん^{あね}それは無理がありますよ」

「姉さん言つな。」

無理なんて事は……多分無いわ！ 完璧な訓練メニュー（地獄の）
作るから覚悟しておきなさい！」

「何っすかその微妙に空いた間！ 後（ ）の中に地獄って何ですか！？」

（帰るのが楽しみだわ♪）

「シカト！？ そしてその怖い薄ら笑いは止めてください？」

薄っすらと危ない笑みを浮かべているユメルダを、必死に押しとどめようとビルは奮闘するが、効果は無い様だ。

と言うより、効果が無いのはビルの声が全く聞こえていないからかもしれない。

ユメルダの頭の中ではきつと、どんな訓練をどの位増やそうかの一点に尽きる。

『落ち着いてください？』『早まってはいけませんっ？』と言う、ビルの必死の叫びは結果的にユメルダには届かず、王都へ帰還後、

さっそく訓練の量は増やされた。

訓練を通り越し、サバイバルの様な訓練が月に5回行われるようになったとか……

まあ、訓練が増やされた軍の質はどんどん上がって行く事になる。

ほとんどの軍に所属していた者は、何故訓練が増やされたのかも分からずに扱じかれた（ユメルダに）。

総隊長（一応）はニコニコしながら訓練の風景を見ていたとか。

止める気はさらさら無かったらしい。

その原因を作ったリシルは、今日もベットの上で計画実行が出来る日を待っているのだ。

番外編 天才って居るもんだ（後書き）

また、次回も遅くなると思います……

ホント御免なさい？

第十一話 パーティー？（前書き）

いつもより早く更新で来た気がする事も無い気がする。

……………御免なさい。

自分で言ってるのに自分自身よく分かっていません。

気にしないでください。

結局更新遅い…………

1日1話更新している人尊敬です。

第十一話 パーティー？

「誕生パーティー……ですか？」

「そうよ」

リシルと話しているのは母メリアナだ。

兄のレオナールが王都に戻った数日後、突然朝早くにリシルの自室へと訪れたメリアナは、いつも以上にニコニコと笑顔でスキップしながらやって来た。

その様子と、いつも訪れる時間よりはるかに早い時間にやって来た事で、リシルは『何か大切な話でもあるのだろうか？』とは思ってはいたものの、まさか誕生パーティーをするなど夢にも思っていなかった。

貴族の誕生パーティーは有る程度の地位さえあれば、1歳の頃からあるものである。

リシルの家は地位が高かったので当然1歳の頃からパーティーは本当ならやる筈だった。

だがリシルの場合、やるにやれなかったと言える。

気付いている人は気付いているだろうが、なぜならリシルはベツト

の上の生活をしていたから。

小さい頃は特に、世話役のメイドですら有る程度の陣形術を使える者（中級の2位以上）にしか任せられなかった程酷い時が有ったから。

メリアナは友人や知人にリシルを見せたくて見せたくて自慢したくて堪らなかつたらしいが、無理なものは無理。

大人になるまでは無理なのかとずっと思っていたらしいが、リシルが魔力の暴走をしなくなり、かなり落ち着いた事で、諦めていた思い実現する事になったとメリアナは嬉しそうにリシルへ話す。

当の本人のリシルはキョトンとしているが。

「仕立て屋を呼んで、パーティーの衣装を作ってもらいましょうね」
「」

「良いんですか？」

「何が？」

「何がって、僕がそうゆう色んな人が集まる場に出ていいのですか？」

リシルがもし人が集まる場所で暴走した場合、集まっていた人々怪我をさせる事になるかもしれない。

それが、他国の人だったら外交問題に成る可能性もある。

他国の人では無く、自国の貴族の場合でも然りである。

「大丈夫よ、お母様にお任せなさい！」

「任せなさいって……えつと……、取りあえずパーティーにはどのような方が来るんですか？」

楽しそうな母に異論は挟めず、取りあえず気になる事を聞く事とした。

リシルは屋敷から外に出た事が無いため知り合いがあまり居ない。

自分の家族や親戚、後は使用人とフェルマンの様に護衛などに付く者くらいだろうか。

「そうね、私の古くからの友人とかあの人（父）の仕事仲間かしら？
余り沢山の人を呼ぶつもりはないの。リシルの負担にならない様にしたいしね」

「父上の仕事仲間！？」

ますます『良いのか？』という疑問がリシルの心の中で増幅される。

リシルの家は言っただけでかなり高位の貴族だ。

リシルの父は貴族の中では一番高い爵位をもっている。

しかも旧家。

そんな父の友人……

怪我なんぞさせたらかなりヤバいのでは？

そんな思考を頭の中でグルングルンさせていたリシルは遠い目になっている事を自身で気付かずに『ヤバイヤバイ』と考えていた。

そんなリシルは、メリアナの言葉で思考の渦から戻ってくる。

「短時間だけリシルが出るようにするからね。

ずっと皆に自慢してるのも良いけれど、また寝込む様な事になったら大変なものね？」

浮かれているように見えるメリアナだが、リシルの事をしっかり考えている様で余り夜遅くまでやるつもりはないとの事。

そして、その事を聞いたリシルは少し安心したとの事。

「あの人（父）にも久しぶりに手紙じゃなくて生で会えるし♪」

「……それは良かったですね」

最後の言葉を聞いたリシルは『そっちが本当の狙いか!?!』と思っ
てしまったのはしょうがないかもしれない。

リシルの父は国の中央で働いている。

簡単に言えば王の幼馴染。

何とベタな。

最近は大ごたごたがあった国の方へ行っていた。

帰って来た後も、王城からしばらく帰ってきていない。

「待ちきれないわねリシル」

「……そうですね」

何だかどっと疲れた様な気がするリシルであった。

番外編 親馬鹿？（前書き）

頑張った……！

寝る時間削って頑張った……！

だから変なことか、ちょっと雑になった所とか大目に見て……！

番外編 親馬鹿？

「貴様……まだ私に仕事をさせる気がっ！」

怒鳴り声が部屋の扉の外にまで響き渡る。

この部屋には陣形術によって防音の術式が掛けられているのだが、怒鳴っている男の声に魔力が混ざったせいで術式を突き破り、部屋の外へと漏れてしまっている。

普通ならそんな事はないのだが、この声の主は普通ではない為常識は通用しない。

「セディー……仮にも一国の主に向かってそんな口きいていいと思っっているのか？」

「問題無いわそんなモン。」

むしろ問題なのは愛しの妻と息子に会えない事だ！ それ以外に何が有る？」

「……いや、そんなモンって……。下手したら反逆罪になるセリフだぞ？ 気付いているのか？」

この城の奥に有る部屋には今男が二人いる。

セディー・リラ・ルーメル・リバメンス公爵【上級の1位】とゼレ
ノス・ルト・レーネ・ヴォルデニス現国王。

そしてこの部屋は王の執務室。

そして言わずとも知れただろうが、リバメンスと付く名前の公爵は
リシルの父。

王の幼馴染兼王の相談役……みたいなもの。

一応。

重要な仕事を押し付けられる事多々。

相談役とは関係ない仕事を押し付けられる事多々。

最近家に帰れていない様子……我慢の限界が来ているらしい。

「可愛いいざかりの息子に会えぬこの気持ち貴様が分かるという
のかっ……………!」

最後に（怒）とでも付けておこうか？

いつも以上に怒りをあらわにしている幼馴染を見て王は一言ぼそっ
と呟く。

「親馬鹿」

「ふんっ！ 何とでも言うが良い？ リシルは可愛いんだぞ！？」

「お前、二人子供いるだろう？ 前はそんなでは無かった筈だが？」

「……………」

「……………どうした？ 急に黙って？」

親馬鹿の自慢話でも始まると思っていたゼレノスは、部屋の床に視線を落とし、急に大人しくなったセディーを訝しげに見つめる。

「……………あいつ等は何と言うか……………その……………幼い頃から冷静と言うか……………クールと言うか……………ドライと言うか……………」

そして、何かから目をそらす様に呟き始める。

「……………つまり？」

「昔から冷たいんだ……………」

「……………まあ、確かに我の見限りでは甘える様な奴には見えなかったな……………」

おい、涙目になるなよ。いい年こいて……………いくら年齢不詳だからって気持ち悪いぞ」

魔力の量が多ければ多い程老けない。だからと言って200年も300年も生きる訳では無く、普通の人よりちよつと長生きする程度だ(この“ちよつと”の大きい小さいは魔力の量で変わる)。

死ぬ時まで若い姿(20代後半)を保つ奴もいたらしい。

その人物は、300年前の世界最強の男だったとか……。

ちなみに、リシルの父は黒髪に金色の瞳を持つ柔らかな雰囲気纏う美形の男。歳は20代後半の姿に見えるが、実年齢は40をとつくにこえている。

長男が23歳というのを考えれば当然かもしれないが……見た目で歳を当てられた事は無いらしい。

「でも今となつてはどうでも良いんだ！」

「……良かったな。」

さあ仕事だ仕事。この書類頼んだぞ」

セディーの目の前にどさつと置かれたのは10?ほどの書類の束が7つ。まさに山の様だ。

これを見たたんセディーはワナワナと震えだす。

そして、ちゃぶ台あつたらひっくり返しているのではないか?とい

うほどの勢いで絶叫する。

「話を聞いて無かったのか貴様――――
――――？」

この叫びは、廊下を通り抜け城中に響き渡ったらしい。

今さら？ 主人公紹介

前に更新した時からかなり間が空いてしまったので、一度お話を全部読み直してみました。

そうしたら衝撃的な事実が！？

気づいている方も居るかもしれませんが……と言つより、ほとんどの方が気付いている気が……

うう……

私がバカつてことに気づかれてしまった！

……えっ、今さら？

そんな事ないですよね？

……まあ、正直に白状します。

主人公の容姿とかが全く書かれていないことに今さっき気づきました。

登場人物のあれこれの紹介は登場した時にきっちりやっておこうと心に決めていたのに……。

なに？バカだつて？

そんなの今さらですうつ！

……まあ、ごたごた言っても仕方がないというわけで主人公紹介に行きます。

名前 リシル・ルノ・リバメンス

髪 長くて艶々 まったく癖の無いさらさらの黒銀の髪

瞳 藍色と金色のオッドアイ

肌 乳白色 しかも超がつくほどスベスベ

もちろん美形。完璧すぎて、動かないで居る時見たらドールの様。髪が長いのは、綺麗だからもったいないと母親が切るのを嫌がるためで、リシル自身も『切っても切らなくても 変わらない』という事で切るのは保留との形になっている。

気性はいたって穏やか。怒っているところを誰一人として見たことがない。

好奇心は旺盛だが、ほぼ屋敷自室の中にいるので今の所あまり発揮されて居ない。

どうでしょう？

今の私はおどおどしっぱなしです。

なにか足りないところがあつたらお知らせください。

今さら？ 主人公紹介（後書き）

突っ込みは勘弁してください……。

本気で反省してます……色々と。

第十二話 リシルの夢？（前書き）

本編かなり久しぶりな更新です！

間が空きすぎて若干おかしな所がある可能性大です。

それでも良いという方はどうぞよろしくお願いします。

第十二話 リシルの夢？

「暇だなあ」

誕生パーティーの日取りが決まり、屋敷の中が慌ただしくなった。普通なら主役であるリシルもある程度の準備で忙しくなる所だが、パーティー開催日間近になって体調を崩すといけないという事で、いつも以上に周りの目が光る中大人しくベットで横になっている。

最低限必要な事以外は何もさせて貰えず、リシルはここ数日はずっと暇を持て余していた。

リシルは何度も『何か手伝いたい』と言っているのだが『私達の仕事を取る気ですか？』『寝るのが仕事！さあ寝なさいな』等と何度言ってもやんわり？と断られるので、リシルも諦めたのだ。

この忙しさには理由が有る。

リシルが暴走した時や侵入者（リシルへの暗殺者）が入った時、生半可な者がいると怪我をするため、この屋敷で雇われる者には厳しい試験があり、教養から戦闘技術から陣形術者としての試験まで幅広い試験をパスした者しか雇用されない。

その試験の厳しさゆえに元々の使用人の数が少ない。

メイドから庭師、おまけには料理人に至るまでレベルは有る程度違うものの審査が有る。

リバメント家に就職希望の者は山ほどいるが、その中の一握りの者しか受からない。

そのせいでこの忙しさなのだが、普通は間に合わない所を王都の方に居る使用人も駆け付け、やっとの事でギリギリ準備が進んでいる。

他にも理由は有るのかもしれないが、ほとんどの事は理解しているので『手伝いたい』と言ったのだ。

実際の所、厳しい試験を受けた者しか雇っていないというのは屋敷中の者が隠していた事なのだが、自然とリシルは気付いていた。

気付いている事はリシルは誰にも言っていない。屋敷の使用人達が『リシル様の所為だと憂う事が無い様に』と隠している事を、わざわざ暴く必要は無いと思っているからだ。

だから、メイドが太ももに短剣を隠していたり、結った髪の中に痺れ薬を仕込んだの針らしきモノが潜められていたり、箒の柄に剣や刀や槍が仕込まれていたり、屋敷のあちこち置いてある置物や飾つてある絵画の裏に様々な武器が隠して有ったり、飾り用の剣に見せかけて実は魔剣だったり、庭師が広い庭のあちこちに屋敷の使用人達にしか分からない様に武器を埋めたり木の中に隠していたり、料理人達が暗殺者を捕まえた時用に、地下室で世界でも知られていない強力即効がうたい文句の自白剤を作っていたりなんて事は気付かぬふりだ。

もちろん、リシルはこの事を教えられていない。

それなのに何故知っているのかというと、少し前から出来る様になった魔力を使う《探知》のおかげだ。

陣形術は大雑把に言えば前紹介したとうりなのだが、その前にはもっと細かい手順が有る。

魔力を極細の糸状にし、それを組み合わせ、陣や紋章を描き出し発動させるのが陣形術。

陣や紋章を描き出すだけの魔力だけでは駄目だ。最後の仕上げで有るその術式の“必要な魔力の量”をきっちり注がなければ発動しない。

しかし、魔力の保有量は努力してもあまり変わらない。

大人になって行く段階で増えるものだが、魔力は歳を重ねることに増える量を減らし、大抵は二十歳前には増える事をやめる。

保有量が少ない者は、それなりの術式しか使えない。

しかし魔力が少ないがために、細かい制御が可能となる。逆に言えば魔力の保有量が多ければ多い程、細かい制御が極めて困難になる。

だからこそその技が有る。

魔力を極細の糸状にする段階で止め、その魔力の糸にとても小さい制御用の印を付ける。そしてその糸をいろんな方向に伸ばす事で、その糸が映像や音などを拾い、その情報を術者の元へ届けてくれるのだ。

これが《探知》。

一人だけではあまり役に立たない。なにしろ魔力の量が少ないのだから糸の数も範囲も限られているのだから。しかし数十人でこの術式を行う事でかなりの広い範囲に糸が届くようになる。軍にはこの術式を使うために集められた集団があり、国に一つは有ると言われている。

ちなみに魔力の保有量が多い者は、糸状にする段階を無意識でやるものだからこの《探知》ができなくて当たり前。魔力の保有量が少ない者は、逆に意識しなくては糸状にならない。

魔力に至っては規格外な保有量を誇るリシルが、なぜこの《探知》が使えるのかは本人ですら分かっていない。

聞かれても『出来るから』としか答えられない。

この《探知》を使えるようになってからリシルは、あちこちに糸を伸ばし外の世界を文字道理“覗^{のぞ}き見”をしている。

やりすぎると体の体調が悪くなるので加減しているが。

そして今日も覗き見中だ。

この屋敷から少し離れた所にある小さな町の様子をリシルは空からよく覗いている。どういう風にかといえ、鳥がのんびりと空を飛んでいるときに見ている風景といえ、ピッタリかもしれない。

「今日も平和だな」

町はいつも道理、穏やかな雰囲気醸し出している。子供達は元気に走り回り、鳥たちは空を飛びまわる。

「いつか行ってみたい……」

“無理だとは思っけれど”

最後の一言を心の中でぼつりとこぼす。

リシルは『覗き見』をやめ、窓から見える空を見上げる。

窓から見える空は限りがある。狭い窓の枠には少ししか映らなくても、その向こうには自由な空が広がっていて……。

リシルは《探知》を使えるようになってからずっと心に秘めていた思いがある。

《いつか自由に外へ出てみたい。

自分の足で行きたい場所へ、誰にも頼らずに行ってみたい。

世界の不思議を……自分の目で見てみたい見てみたい》

リシルはこの《敷地》から出られない。理由は色々あるが……一言

で言えば『大人の事情』。

この思いは前世では思ったことのない事。

これはきつと“夢”というモノなのだろう。

「……………世界は広い……………」

これはリシルが身近で知る人で、貴族等のしがらみに囚われず生きる人に聞いた言葉だ。

『世界は本当に広いわ。』

旅をすればわかる、地域によって様々な文化があるもの。

少し海を越えるだけで見たこともない世界が広がっているの……………。

想像してみて、知らない生き物、不思議な植物、考えたこともない習慣を持つ国、見たこともない色素を持った人達……………。

ね、素敵でしょう？』

この話をしてくれた女性はリシルの誕生パーティー開催日にはこちらへ“帰って”来るらしい。

「楽しみだなあ」

そう呟き、目を閉じる。

誕生パーティーまであと16日

第十三話 久しぶりの友人「？」（前書き）

ちょっと遅くなってしまいました……。

申し訳ないです。

第十三話 久しぶりの友人「？」

これはリシルの誕生パーティー前日の出来事。

『おや、いつもより元気そうではないか。

ベツトの上なのは以前から変わりはないが、顔色は前会った時より断然いい』

リシルは窓の枠に止まっている、久しぶりにやってきた友人に向かって微笑みかける。

「ここ2週間はここでずっと大人しくさせられていたからね。

悪くなるわけがないよ。それにしても久しぶりだねコクロ。ここいら周辺に用が有って来たのかな？」

首を少し傾げてそう尋ねる。^{たず}

コクロ肩？を少し上げて『やれやれ、そういう事には鋭い。ただ単に遊びに来たとは思わんのか？』と答える。

リシルに親しげにコクロと呼ばれているのは人ではなく、おそらくではあるが“魔鳥”と呼ばれる鳥の一種である。

《魔》がつくのは魔力を持つ意味。魔鳥というからには魔力を持っている。コクロは魔力を持っているため、リシルは“魔鳥”と判断している。

コクロは琥珀色の瞳に青緑の羽を持ち、同色の長い尾羽を持っている美しい魔鳥だ。体は人の頭程度の大きさしかない。魔鳥の中では小さい分類に入るが、かなり優れた知能を持っているらしく、所々の動作や口調が何となく人間臭い。

魔鳥の種類は分らない。一度調べたことがあるが出てこなかったのだ。

最初この屋敷へ来た時は『何しに来たんだろう？』と思っていた。なぜ来るのかはいまだに分かって居ないが、時々やって来るたびにいろんな話をしていたり、屋敷の者にはなかなか相談できないことや、話を聞いてもらっているうちにいつの間にか兄弟のように仲良くなっていた。

「なんとなく思ったんだ。

なんか何時もと様子が違うような気がしたんだよね」

リシルは何とでもないように答えるのを、コクロは目を細めて見つめる。

『…………（本当にこやつは相手の心を読むのがうまいな）確かに用事があって来た。聞きたいことがあってな』

コクロは一つうなずきながら言う。

「聞きたいこと？

僕はこの屋敷から出るどころかこの部屋から出る事もなかなか出来ないんだ。

そんな僕に聞けることなんて何も無いと思うんだけど…………」

『聞くならもつと他に適任がいると思うよ』そう言うリシルにコクロは首を横に振りながら『そうもいかない』と答える。

その答えにいぶかしげな視線を送ってくるリシルにコクロはしょうがないかと話し始める。

『我ら一族は“特別な何か”が起こらない限り人前に姿を現せんだよ。』

これは掟のようなものでな、私にもどうすることもできないのだ。どうかしようと思った事は無いが』

その話にへえ、と納得しかけたリシルであつたがあることに気づく。

「じゃあ、なんで僕の前には現れたの？それでも一応は人間だよ？」

それにコクロはキョトンとした顔を一旦するが、すぐに破顔する。

『リシル、そなたは“特別な何か”に入るのだよ』

リシルはますますいぶかしげな表情になり「どういう意味？」と尋ねるが『わが一族の基準だ。言ってもおそらく分からないと思うぞ』とコクロはそう言う。

押し問答をしばらくするが、リシルが折れる。

「分かったよ。教えてくれそうに無いし、もういいや。」

で、聞きたい事って何なのかな？僕が答えられる事なら答えるよ」

協力は惜しまないと言うリシルに、コクロは少しだけ翼をはためか

せる。

『感謝する。では聞こう。』

そう言つてコクロが質問した内容は、リシルが「なぜそんな事を？」と思う程度のモノであつた。

何故この質問をされたのかは、これから数年経つた時に判明する事になる。

『助かつたよ。礼を言う』

そう言つて飛び去つていく友人に「また何時でもおいで」とリシルは窓際まで移動して手を振つた。

そしてその後、窓際に立つリシルを見つけた使用人たちに怒られるのはもう少しだけ後の話。

明日はパーティー。何も起こらず終えるかはまだ分からない。

第十三話 久しぶりの友人「？」（後書き）

一週間以内に次話を更新します！

第十四話 だーれだ！（前書き）

ぎりぎり間に合った！

第十四話　だーれだ！

「急いで〜！

パーティー始まっちゃうわよ！」

「急いでって……、お前が道間違えたせいでこんな時間になったんだぞ」

「ガトーさん諦めましょう。方向音痴の人に頼った僕たちがいけないんですよ……」

「……それ、言ったらおしまい」

「なによ！みんなして酷いわぁ〜」

今、リバメント家のすぐ近くの森を馬に乗って疾走する冒険者一団がいた。

一番上から、扇情的な格好をした女性。髪は艶やかな黒髪に藍色の瞳、肌は雪のように白く、一般に言うナイスバディーな超が付く美女。名前はフィー「20」、愛称らしいが本命は仲間ですら聞いたことがない。

背が高く、身体つきも筋肉がきつちりつくところにはついている青年だ。濃い金髪に緑の瞳、浅黒い肌。美形ではないが、精悍な顔をしている。名前はガトー・ロルク「22」、真面目でしっかり者なのでこの一団のまとめ役だ。

最後の二人は兄妹、兄の方はリク・フーデンス「18」。青年と言

ってもいいかもしれない年齢だがまだ幼さがまだ抜けきらない顔だ。妹の方はリナ・フーデンス「15」。まだ少女と言ってもいい容姿で、兄弟そろって朱色の髪に紅の瞳を持っている。

後ろから三人は幼馴染。ギルドで依頼を受けた時たまたま同じ依頼を受けたフィーと出会い、意気投合。それ以来一緒に行動している。

そして今回は、フィーの弟の誕生日パーティーをやるとの手紙が届いたので『一緒にどう？せっかくだしおいでよ』と誘われ向かっている最中だ。

どうやら手紙の文中に『お友達連れてきてもいいわよ』と有ったらしい。

「しかし、こんな森の中に家なんてあるのか？」

ガトーはリフィーに疑問を投げかける。

この疑問はもつともな事だ。はつきり言って森は動物の他にも魔獣などが出て危ない。だからこそ人は集団で生活するのだから。森に入る前に大きい町に行った時、ここに実家があるのかと三人は思ったのだが『さあ、明日は馬で移動よ！』とリフィーが言ったのを聞き『えっ？』となったのだ。感情が乏しいリナですら首をかしげていた。

それもそのはず、フィーが馬で移動すると言い出した“明日”がパーティーをするらしい日なのだから。そして、ここいら周辺にはこの町だけで、朝に出て夕方には着くようなところに町おろか村すらない。

その事に、フィーは『我が家はちよつと特殊な事情があつてね、弟が生まれる前はこの町にあつただけど』少し間をあけてから『まだ教えてあげない』すっごいいい笑顔で締めくくった。

フィーは普段自分のことを全くと言っていいほど話さないので、初めてのことになりナ以外の男二人は若干緊張しながら聞いていたのだが最後のできが削がれてしまった。

その後も、この話は出なかったたのでその“特殊事情”の話はいまだに聞けないでいる。

馬でいくらか走り続けると森の先に明かりが見えた。

「着いたのか？」

ガトーがフィーに向かって聞く。

「いいえ、まだよ。ここで馬を降りて歩いていくの」

「……？」

「何ですか？」

「これも”特殊な事情”の一つかしらね。

後で分かるから今は教えないわよ、面白いし！」

はつきりと言い切るフィーに飽きれ顔のガトーとリクを綺麗にスルーしたフィーは馬を降りる。三人もそれに続き馬を降りる。

そして、先ほど見えた明かりのついている馬舎に馬を入れて歩き出

す。

「少し歩いたら“あの子”が出てくるから、後ろで観戦しててね」

「あの子？」

ガトーとリクは聞き返すが、フィーは笑うだけで答えない。

「そろそろね」

そう突然つぶやくと、荷物の中から大きめのフードが付いたコートを取り出し身にまとう。ボタンもしっかり全部留め、フードも深くかぶる。

突然のことに『どうしたんだ？』という視線をを無視する。

「手は絶対に出しちゃだめよ」。

大怪我することになるわあ……痛いのは嫌でしょ？」

『何が起こるんだ？』と聞く前に突然の乱入者の声に遮られる。

「その侵入者共、即刻ここから立ち去れっ！！」

威圧感のある声が森に響く。月をバックにしたその声の主の顔は見えない。大きい影が四人を包み込んでいた。

「来た来たっ」

楽しそうにフィーが呟くのを聞きながら『いつたい何事！？』と男二人は驚きを隠せない。

「立ち去らないのなら……、

排除するっ！！」

その宣言を聞いたフィーは笑みを深めると、

「さあ、どのくらい強くなったのかしらね」

本当に心から楽しそうだったと言っておう。

第十四話　だーれだ！（後書き）

なんか中途半端なところで区切ってしまいました……。

なんかごめんなさい。

第十五話 前話の続き（前書き）

かなり間が空いてしまいました。

申し訳ないです……。

なんか謝ってばかりですね私。

第十五話 前話の続き

甲高い音が静かな森にこだまする。

大剣を軽々と振り回すメイド姿の小柄な少女と、双剣を手に、コートで姿を隠した女性がぶつかり合う。

木の枝や葉が次々と剣に切られ宙に舞う。

時々、木の幹が真つ二つに切られ綺麗な切断面を見せている。

かなりの速さで斬りあっているため、人の形をした影と影が斬りあっているように見える。

その影が森の中を順応無尽に飛び回る。

その目で追うのがぎりぎりの、ハイレベルな戦いを魅入られた様に呆然と見守る男女三人組。

戦っている二人が交差したその時、

コートを着ている女性が深く被っていたフードが、メイド服姿の少女が起こした大剣の暴風により、はらりと外れる。

メイド服姿の少女はもう次の攻撃へと移っていたが、接近するにつれて月明かりに照らされたコートを着た女性の顔をはっきりと視認した瞬間、急ブレーキをかけるとバックステップで一氣に後ろへと後退する。

後退した時についた片膝を地面につけたまま呆然と女性を凝視する。

「ふふふっ、強くなつたわね♪ 前より断然剣筋が良くなってるわ」

コート姿の女性の声を聴いた瞬間、少女は頬をひきつらせて悲鳴のような声で名前を叫ぶ。

「ミルフィーネ様——————っ!？」

どうやら知り合いの様である。

「……………」

「ごめんね？」

謝るからそんなに拗ねないでちょうだい」

「拗ねてなんていませんっ」

頬を膨らませ、ふいつと顔をそらすリティーに向かって謝っている
フィー……正式名では、ミルフィーネ・ネル・リバメント。

歳は20で、リシルの実の姉である。

悪気なんて雀の涙ほども無い様に笑うミルフィーネを見て、ますます
リティーはふて腐れている。

ふて腐れていると言うより、自分自身が仕えている主家の長女に剣
を向けてしまった事での自己嫌悪中と言える。

気付かなかったとはいえ、リティーは基本が真面目なのでかなり応
えているようだ。

今回の騒動はこうだ。

ミルフィーネの元にパーティーの招待状が来た。 ↓ 友人OK？
じゃあ三人を連れて行こう！ ↓ 友人を連れて行く事を、手紙で
連絡し忘れる。 ↓ その後連絡していないことに気づくが、面白
いことが起こりそうだと結局しない。 ↓ 本家の方は友人OKと
手紙に書いたものの、返事が来なかったのでミルフ「フィーネ」一
人で来ると思い込む。 ↓ パーティー当日、リシルを狙う者やパー
ティーに来た大物を狙った刺客が紛れ込む可能性ありのため、屋敷
の者は皆ピリピリしている。 ↓ パーティー開始寸前屋敷に近づ
いてくる者たちを感知、一人はコートで姿を隠した不審な四人組。
↓ ミルフィーネは一人で来ると思われているため、この一団が
ミルフィーネの連れだと気付く者無し。 ↓ あやしい！とりあえ
ず警告して、それでも退かなかつたならば捕まえれば万事解決！
↓ リティー出撃 ↓ 戦闘のさなか、こうなることを予想してコ
ートを着て、姿を隠していたミルフィーネだが、フードが取れ
ばれる。 ↓ 不審人物の正体に気付いたメイド姿の小柄な少女…
…もといリティーの悲鳴 ↓ 今の状況。

ミルフィーネの予想的中。

ちなみに、不審者が屋敷への侵入を阻止するために屋敷の者が出て
くると言うのがミルフィーネの予想である。

誰でも予想できるなんてことは言っではいけない。

「楽しかったわ」

最近あんまり強い奴に出会えなかったし」

「……はあ」

「ため息吐くと幸せ逃げちゃうわよ」

「誰のせいだと思ってるんですかつ」

「おほほほ。」

「さあ？誰のせいかしら」

リティーが何かを諦めた様に項垂れているのを、ミルフィーネが面白そうに見ている。

一方、仲良さげ？な二人の様子をミルフィーネの連れであるガトーとリクとリナはこそこそと話していた。

「メイドの服を着ているという事は召使いですよね？」

「召使がいるという事はフィーネさんの家は裕福なんでしょうか……」

「……（こくこく）」 ↑リナ

「このメイド服の生地、かなりいい品っぽいで。」

「しかも、こんな森の中じゃ家とかの維持費もけっこう掛かると思う」

「……結局どういう事なのでしょう？」

「……（キョトン）」

すっかり思考が煮詰まってしまった様で、ガトーとリクはしきりに首をひねっている。

リナはいつも道理だ。けれど色々疑問には思っているようで時折ミルフィーネの瞳をじっと見つめてきている。

その訴えるような視線にミルフィーネはにつこりとほほ笑む。

「私の実家に着けば分かるからまだ内緒」

絶対教えてくれなさそうな雰囲気的笑顔で言い切るミルフィーネを見た男二人は如何したものかと顔を見合わせ、はこてつと首をかしげている。

「ミルフィーネ様……もしかして彼らに何も言わずに連れて来たんですか？」

「あ、ばれちゃった？」

「もしかしくなくてもそうみたいです……」

生温かい目でミルフィーネを見た後、同情の念がこもった眼差しを三人へと向けると簡潔に言い切った。

「諦めつてやつぱり肝心ですね」

男二人はうんうんと肯き、『分かってくれる人が居た』と嬉しそうにしている。その二人を見ながらリナはますます疑問符を浮かべている。

見た目だけは良いミルフィーネは、もちろんのこと冒険者に人気がある。しかも強い。周りから見ればミルフィーネと組んでいる三人は羨ましがられる事が多い。

『中身と見た目が比例しないのを知れ』と、羨望や嫉妬の眼差しで

見てくる奴に言いたいと何度思った事が……。

もちろんガトーとリクからその他の冒険者たちへである。

「大丈夫ですよ。」

そんな心配するような事はありません。ちょっと特殊なだけです。ミルフィーネ様を見ていれば分かると思いますが……。」

リティーは、ちらりとミルフィーネの方へ視線を送ると、三人に視線を戻し綺麗な笑顔で言い切る。

「ちょっと一般常識からずれた人たちが自然と集まっているだけですよ。」

「「……いやいやそれは大丈夫って言わないと思う（思います）」」

「……？」

ミルフィーネの連れ三人組が驚きの真実を知るまであと少し。

第十五話 前話の続き（後書き）

次は早めに更新できるように頑張ります！

頑張りの成果が出るとは限りませんが……。

間違いの指摘いただきました……本当に助かります。

第十六話 何でコレ？（前書き）

今回頑張りました！

寝る時間削って！

第十六話 何でコレ？

少し前に戻ってリティーがちょうど出撃した時間、そしてパーティー開始直前、リシルは二度目の人生で数回目の難関を迎えていた。

「……やっぱりこれを着るの？」

「その様です」

「……」

リシルは戸惑った様子であるモノを見下ろしている。

リシルの目の前に置かれているあるモノとはパーティー用の衣装だ。

この世界では当たり前前の服でもリシルにとってそうではなく、はか
なり着るのに勇気がある服がある。

その筆頭がパーティーなどで着る衣装だ。

見た瞬間と言コスプレう言葉が脳裏を過ぎる。

オタク要素のある人ならリアルで見れる&着れることに喜ぶかもしれないが、生憎リシルにはその様な要素は全くない。

どちらかと言えば、パジャマのようなものばかりで過ごしてきたのだ。

前世も現在も。

昔は普通の服を着る事なんてめったに無かった。今も、時々外へ出るときに着るのは締め付けがあまりないゆったりした物が多い。

この世界での衣装はまさに《中世ヨーロッパの服》。

一部の人が見たら真っ先に思いつくのはきっと○執事。

分かる人は分かるはず。

「リシル様に着こなせないもの等ございません」

「……目を逸らしながら言っても説得力無いからね」

ちなみに今、リシルと話しているのはリシル専属筆頭侍女モルティナ・サフレー23歳、きつちりと青色の髪を後ろに一つでまとめ、水色の鋭い瞳には隠すように眼鏡をかけている（まったく隠せていないが）。リティーの上司にあたる人物だ。リシル一筋。リシルに危害を与えようものなら一国の主にですら牙をむく。

ちなみに、一度殺りに行ったが、リバメンス家当主が必死に止めた

セティー

おかげで事なきを得た。

はっきり言って最強のメイド様だ。

基本無表情。

ダメな所が探しても余り見つからない完璧な人だが、リシルの為となると非常識な事だろうがなんだろうが平然とやるため、周りの人間が苦勞することが多々ある。

おもにリシルセリィーの父が。

「……しょうがないか」

「何事も慣れでございますよ」

『慣れてどうするのさ……』と呟きながらリシルはまた目の前の衣装に視線を落とし、溜息を吐く。

客人達はもう全員到着してしまっている。どう考えても（時間的に）逃げ場はないため、リシルは覚悟を決めたようだ。

《ドレス》を着るための。

……リシルの母が朝嬉しそうに持ち込んだコレ。

まさかの《ドレス》

『これしか衣装無いから着てね！

もー、私気合い入れてデザイン決めるの頑張っちゃったんだからあ
ゝゝゝ』

満面の笑みでこの爆弾発言を言い放った。

『あんた息子をなんだと思ってる！？

息子に変な道に走らせたいのか！？』

フェルマンの心の叫びでした。

慌ててセディ - の元へこの緊急事態を伝えに行ったが帰って来ない
のだ。

足止めにあっている可能性有り。

「しょうがない。ぐだぐだ言ってもしょうがないし……よし……
じゃあこれをk「【パンツ】お待ちくださいっ！」あれ？フェルマ
ン何でそんなボロボロなの？」

リシルがキリツと顔を上げ、ドレスを持ち上げたところでフェルマ
ンが扉を蹴破る様な凄い勢いで開け、部屋へと駆け込んできた。

「ま、間に合った……！」

ゼイゼイと息をするフェルマンは、服の一部が裂け、体の所々に切り傷が有る。

「遅くなって申し訳ございません！メリエラ様の妨害に会いました……セディ様の所へ助けを求めることを、どうやら予想していたようです」

何とも恐ろしい方だ。

そう最後に言うと、身震いする。

何か恐ろしい目にあった様である。

「メリエラが何か企んでいるとは思ってたが……」

さすがにこれはやり過ぎだな。

リシルは突然聞こえた声の方向を見ると、厳しい顔をしたセディが扉を開けて部屋へと入ってくる所だった。

モルティナは礼をすると後ろへと下がる。

「父上！」

「リシルはかわいいな」

厳しくなっていた顔がリシルを見た瞬間でれっと崩れ、リシルの頭を撫でながら頬ずりをする。

威厳何処に行った状態のセディ・にいつもなら『顔が崩れていますよ』と忠告するフェルマンだが今日は余裕がない様子で言う。

「そんな事してる場合じゃ無いでしょう！」

焦りを隠せずにいるフェルマンをセディ・は見ると一つうなづく。

「大丈夫だ。」

何かやらかすとは思っていたからいろいろ準備しておいたんだ」

セディ・はリシルを抱き上げると優しい笑顔を息子へと向ける。

「安心なさい」

この言葉は、
実の所悪魔からの言葉だと気付くのは少し後のこと
である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5094s/>

転生物語

2011年11月16日19時58分発行